



(七 尾)

事業にかかるもので、遺跡に影響を及ぼす排水路部分のみの調査であった。そ

田鶴浜町は能登半島の頸部に位置し、北に七尾湾、北東に能登島を望む。吉田C遺跡はその田鶴浜町のほぼ中央部、赤蔵山南東裾部に立地している。遺跡の南には吉田川が東西方向に流れており、周囲は吉田川によって開析された小さな谷状地形をみせている。

本調査は、県営圃場整備

石川・吉田C遺跡

よしだ

- 1 所在地 石川県鹿島郡田鶴浜町吉田
- 2 調査期間 二〇〇〇年(平12) 八月～九月
- 3 発掘機関 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩瀬由美・西田昌弘
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

のため、幅二mのトレンチ状の調査区を三カ所設定し、それぞれを北・南・西調査区と呼称して調査を行なった。調査面積は計五二〇㎡である。

北調査区は、ほぼ全域が鞍部に位置する。鞍部以東では明確な遺構が確認できず、遺跡の縁辺部と理解される。遺物の出土は、肩部寄りで少なく、調査区中央部から西側にかけて多くみられた。八世紀後半から九世紀に比定される土器が主体を占めており、特に、中層から下層にかけて、完形に近い須恵器杯などの出土が目立った。須恵器杯・蓋の中には墨書されたものも数点出土しており、「厨」

「地」「地地」「地□」「大」などを確認している。

木簡はいずれもこの鞍部において出土した。計三点出土しており、出土層位は中層から下層直上にかけてであった。また、木製品の出土も多く、板材や杭状木製品、箸なども出土している。

一方、南調査区は遺構・遺物ともに希薄であり、縄文土器と土師器が散見するにとどまる。また、西調査区では、弥生時代終末から古墳時代初頭に比定される柱穴などが確認できたものの、古代のものも確認されなかった。

本調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての中心域を遺跡南西部に求められる一方、古代においては、建物跡などは未確認ながら、その中心域を北半部に想定することができよう。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「く三国子一石」

190×27×2 032

(2) 「戸主山□マ□得万呂」
〔真カ〕

(111)×(22)×3 081

(3) 戸主真

(89)×(24)×5 081

(1)は、二つに折れた状況で出土した。左上端部のみ破損しているものの、上端部左右に切り込みを入れた付札である。その形状や近世の駿河・遠江国における村明細帳に「四国」という品種の稲がみられることから、本木簡は稲の品種を記した付札であると推測される。

(2)は、左側面が二次的に削られ、「呂」字の下で欠損しているため、全容は不明である。しかし、「戸主十人名」と読みとれることから、籍帳に関連した木簡と考えられる。

(3)は、左側面がキリオリされており、上下端部は欠損している。(2)と同様、籍帳に関連した木簡と考えられる。

なお、木簡の釈読にあたっては国立歴史民俗博物館の平川南氏にご教示を賜った。

9 関係文献

(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』五(二〇〇一年)

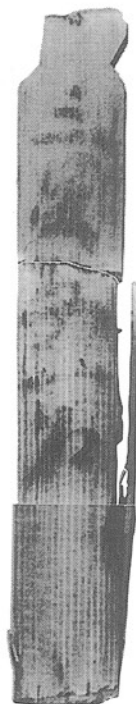
(西田昌弘)



(3)



(2)



(1)